

令和4年度 中間期自己評価書

愛南町立平城小学校

【評価基準】 A:目標を達成 B:8割以上達成 C:6割以上達成 D:6割未満

中間期

1 正しい子

重点目標	評価指標及び目標値(期待される姿)	評価	考察(◇)及び改善方策(◆)	評価資料	アンケート結果				
					肯定割合	4	3	2	1
あいさつができる子を育てる。	指標① 進んであいさつをしているか。 目標値 児童・保護者・地域住民・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期 A	◇地域や児童、教員の肯定率は90%を超えており、低い数値の保護者でも87%となっており、A評価である。前年度の比較においては教職員の評価が16ポイント上昇している。一方で、児童自身の評価に比べて、保護者の評価が低くなっており、家庭でのあいさつができていないように感じている保護者が多いと思われる。また、一番高い評価をしている教員からは、挨拶ができる児童とできない児童との差が広がっている。挨拶の声が小さいという意見が見られ、今後の課題と思われる。 ◆児童会の取り組んでいる「すまいるあいさつデー」などの児童を中心とした活動に注力しつつ、教員や保護者といった周りの大人からの継続的な声掛けをしていく。また、集団のリーダーとしての高学年に手本となるように働きかける。	児童アンケート① 保護者アンケート① 地域住民アンケート① 教職員アンケート①	90 87 93 95	49 31 22 11	41 56 71 84	9 12 7 5	1 1 0 0
	年度末		児童アンケート① 保護者アンケート① 地域住民アンケート① 教職員アンケート①						
返事ができる子を育てる。	指標② 返事がしっかりとできているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期 A	◇児童、教員ともに、肯定率が90%近くおり、A評価である。特に、教員は前年度と比べて24ポイントも増加している。しかし、児童は「とてもそう思う」の割合が7割を超えているのに対し、教員は「だいたいそう思う」の割合が9割近い。児童と教員の間に、「返事ができている」ことに対する認識の違いが見られる。挨拶と同じで、できている児童とできていない児童の差が見られるという意見が多く見られた。 ◆話を聞いていないと、返事をすることができないので、まず、人の話をきちんと聞くことを授業を通して伝えていく。学校生活の中で、機会を見つけて、その都度声掛けをしていく。授業を通して訓練していく。	児童アンケート② 教職員アンケート②	89 95	45 5	44 90	10 5	1 0
	年度末		児童アンケート② 教職員アンケート②						
学校関係者評価委員の意見	○声の大きさより、相手の顔を見て誰と挨拶をしているのかを意識させたい。 ○集団ではできるが、個別になるとできないケースが見られるが、なぜ挨拶が必要かを子供に理解させることが必要。 ○高学年の児童がお手本となっている。 ○安全面からも挨拶は大切。名前を読んで挨拶をしている地域もある。 ○保護者ができているか、家庭内の挨拶の現状はどうだろうか。挨拶返事は生活習慣の基本なので、大人が手本となり、家庭でしっかり働きかけを続けることが大切。	学校の対応	○児童会が毎月取り組んでいる「スマイルあいさつデー」の活動の他、人権委員会が各学級を回って行う挨拶運動や、6年生が挨拶係を決め、各玄関で挨拶を行うなど、高学年が中心となり児童主体の活動が広がってきた。子供たちの頑張りを称賛し、意欲を継続させると同時に、挨拶が相手に思いを伝える大切なものだとすることを理解させる。また、家庭への協力を呼びかけ、子供たちの1日が挨拶で始まり挨拶で終わるよう啓発する。 ○返事は、相手の言葉を受け取った意思表示であり、相手の話をしっかりと聞くことが、相手を思う気持ちからなることを理解させ、お互いを大切にすることを育てる。						

2 考える子

確かな学力の定着と向上に努める。	指標③ 授業が分かっているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期 A	◇児童、教職員ともに肯定率が90%を超えており、A評価である。しかし、全体的に見た評価はAであっても、児童一人一人を見ると個人差が大きいことや学力の二極化が見られるなど課題は見られる。 ◆日々の授業の中で、個に応じた指導を継続することは難しく、休み時間や放課後の補充学習で対応している。今後も計画的に補充学習を設定し、個に応じた指導ができるようにしていく。	児童アンケート③ 教職員アンケート③	91 57 34 7 2	95 5 89 5 0
		年度末		児童アンケート③ 教職員アンケート③		
	指標④ 授業でICTを積極的に活用しているか。 目標値 児童・教職員の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期 A	◇児童、教職員ともに肯定率が90%を超えており、A評価である。昨年度末に挙げられていた学級による使用状況の差も解消され、休日の活用も各学級の足並みを揃えて実施できた。 ◆授業の中で活用する機会は増えたが、授業の各場面での有効な活用方法や、ICT機器を使った対話の方法、ICT機器活用のモラルなど課題も見えてきたので、その活用方法について、研修や情報交換を積極的に行っていきたい。	児童アンケート④ 教職員アンケート④	98 79 18 2 1	95 53 42 5 0
		年度末		児童アンケート④ 教職員アンケート④		
	指標⑤ 家庭学習を毎日15分×(学年)以上しているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期 C	◇児童79%、保護者77%の肯定率でC評価である。多くの児童は家庭学習の習慣が身に付いており、学習時間を確保することができている。しかし、家庭での学習が習慣化できていなかったり、自主学習等を工夫して学年に応じた学習時間を確保できていなかったりする児童も見られる。 ◆やるべきことがきちんとできるようにする。そのために、家庭学習の習慣が身に付いていない児童については、家庭と連携を図りながら個に応じた指導をしていく。また児童が自主学習等、一人一人の課題や興味・関心に応じた課題に取り組むことができるような指導をしていく。	児童アンケート⑤ 保護者アンケート②	79 49 30 15 6	77 42 35 20 3
		年度末		児童アンケート⑤ 保護者アンケート②		
指標⑥ 毎日家庭読書をしているか。 目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	中間期 D	◇児童62%、保護者42%と、ともに肯定率はすべての質問項目の中で最も低くD評価である。図書の貸し出しを利用する児童にも個人差が大きい。学校では週に2日朝読書の時間を設定したり、読み聞かせを行ったりして読書の時間を確保するようにしているが、家庭で読書をする習慣がないことやそのための時間を確保することが難しいことが肯定率の低さにつながっていると考えられる。 ◆夏季休業中の課題として、各学年読書の宿題を設定した。また、2学期には新しく購入した図書の貸し出しが始まったり、読書週間の取組も計画されたりしている。まずは本に興味を持つことができるように働きかけていく。	児童アンケート⑥ 保護者アンケート④	62 36 26 23 15	42 11 31 39 19	
	年度末		児童アンケート⑥ 保護者アンケート④			
学校関係者評価委員の意見	・家庭学習については、学年が上がるほど時間の確保が難しくなり、声掛けなど家族の協力も必要だと思う。 ・学校での読書時間には限界がある。そのため、家庭内で読書の時間を設定するといいたい。そのためにも親子読書はよい取組だと思う。その取組が読書のきっかけとなればよい。 ・短い時間でも学習の定着が図れるようにICTの活用や自主学習の内容があれば取り組みやすいのではないかと。 ・子どもたちが生活時間を見直し、時間確保させることが必要。 ・ICTの活用は大変いいこと。今後必要なスキルなのでどんどん活用していければありがたい。	学校の対応	○授業改善やICTの活用により個に応じた指導に取り組む。また、取り残される児童がないよう、昼休みや放課後の時間を活用して、計画的に補充学習を行う。 ○新しく購入した本や、各教員のお薦めの本を紹介し、子供たちに読書の楽しさを伝える。家庭読書の取り組みとして、2学期は、親子読書を実施し、家族で読書に取り組めるようにする。 ○児童の家庭学習の習慣化については、習い事やスポーツの活動で忙しく過ごす児童も多いが、自分の生活時間を振り返り、学習や読書の時間を確保出来るよう計画を立てさせる。			

3 強い子

健やかな体を育てることに努める	指標⑦ 「早寝・早起き・朝ごはん」ができているか。	中間期	B	<p>◇朝ごはん摂取率については、すくすくカードや健康観察時の調査でも、90%以上であり、目標は達成できているが、バランスが取れているとは言い難い。睡眠については、調査では毎日ではないが、夜更かししている児童が数名いる。ゲームやテレビの時間が長いのも一つの要因となっている。</p> <p>◆すくすくカードや健康観察時の調査・指導の継続や学校だより・保健だより・食育だより等で啓発活動を行うとともに、R4年度から食育推進校指定も受けており、学校全体で食に関する指導を進めていきたい。</p>	児童アンケート⑦	89	58	31	7	4
	目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)	年度末			保護者アンケート③	86	39	47	11	3
	指標⑧ 外で元気に遊んでいるか。	中間期	B	<p>◇学校生活において休み時間は、多くの児童が運動場で元気に遊んでいる。特に昼休みには多くの教員が児童とともに遊んでいる姿が見られる活気があると感じる。しかし、外で遊びたくない児童やお直しで遊びに出ることができない児童がいることもある。また、家庭生活においては、外で遊ぶ児童が少ないと予想されることやコロナ禍による制限もありC判定となっていると思われる。</p> <p>◆教員による外遊びの継続や学級遊びの活性化で外で元気に遊ぶ児童を増やしていきたいと思う。</p>	児童アンケート⑧	82	56	25	14	5
	目標値 児童・地域住民の90%以上が肯定割合(4+3)	年度末			地域住民アンケート②	89	22	67	11	0
学校関係者評価委員の意見	<ul style="list-style-type: none"> ・きょうだい関係など家庭環境によって生活スタイルが異なり、リズムが崩れてくる子もいる。 ・夜更かしは早起きの妨げになるが、夜遅い食事も朝ごはんが食べられないなどの原因となる。簡単にできるバランスの取れた朝食レシピなど紹介していければいいと思う。 ・基本的な生活習慣について家庭でしっかり考え取り組むことが大切。朝食の大切さを具体的に理解させることが必要。 ・コロナにより休日お家で過ごすことが多いため、ゲームやテレビの時間がかなり増えている。 	学校の対応	<p>○朝の会の健康観察で生活時間の確認をしたり、定期的なすくすくカードに記録したりすることで、自分の生活を振り返らせるようにしている。今後、それらの結果を保護者にも返し、各家庭で子供の生活時間について保護者とともに振り返る機会を持つ。</p> <p>○夏休みに毎年恒例の朝ごはんレシピを各家庭で取り組んでもらった。今後、その結果を紹介し、各家庭でも取り組んでもらえるように呼びかける。また、現在、食育推進指定を受けており、食の大切さを含めて、子供たちだけでなく、保護者にも学校だより、保健だより、食育だよりを使って情報発信し、啓発していく。</p>							

4 生徒指導

生徒指導の徹底と健全育成に努める	指標⑨ 楽しく学校生活を送っているか。	中間期	A	◇児童、保護者共に肯定率は90%を超えており、A評価である。前年度と比較しても児童は6ポイント上昇しており、「全くそう思わない」と回答した児童が4ポイント減っており全体的に楽しく学校生活を送れている児童が増えてきているといえる。一方で「あまりそう思わない」と回答した児童も7ポイントおり、全教職員で注意深く見守っていくことが大切である。 ◆組織的で、迅速に対応し、早期発見、早期解決していく。そのために、アンケートや児童を見つめる会を通して確実に情報共有を行い、家庭と連携をしていく。また、教職員が一人で問題を抱えることがないように、お互いに声を掛け合い、外部機関への協力依頼も積極的に行っていく。	児童アンケート⑨	93	71	21	7	1
	目標値 児童・保護者の90%以上が肯定割合(4+3)				保護者アンケート⑤	95	67	28	5	0
		年度末			児童アンケート⑥					
					保護者アンケート⑤					
学校関係者評価委員の意見	・大多数の児童が楽しく学校生活を送れていることに安心したが、あまりそう思わないと回答した児童への対応が必要だと感じる。 ・何が不安で学校が楽しくないと感じているのか子どもたちが話せる場はあるのだろうか。 ・情報モラル教育を低学年段階から行うといい。		学校の対応	○学校生活を楽しくないと思っている児童について全教職員で共通理解を図り、日頃の生活の様子等、複数の職員の手で見守る。 ○子供たちが日頃感じていることを気軽に話すことができるよう、学級だけでなく学校全体で、教育相談を計画する。 ○これまで行っていた高学年対象の情報モラル教育だけでなく、各学年に応じた情報モラル教育が行えるよう、カリキュラムの見直しを行ったり、えひめっ子情報リテラシーアプリなども活用したりして進めていく。						

5 教職員

教職員の人間力・指導力・組織力の向上に努める	指標⑩ 研修の自己研鑽に努めているか。	中間期	C	◇教職員の肯定率は79%であり、目標を達成することはできなかった。自己研修のための時間を見出すことができないくらい、日々の業務に追われていることが要因と思われる。 ◆夏季休業中など、時間に余裕のあるときに、研修の方向性の共通理解と日々の実践の情報交換を行い、みんなで足並みを揃えて研究を進めることができるようにしたい。そして、教職員がそれぞれ自己の課題と向き合い、進んで教育技術や指導法の改善に努めるために、ミニ研修の時間を確保する。また、ICT研修など、組織的なスキルアップを図る場を設定したい。	教職員アンケート⑥	79	5	74	21	0
	目標値 教職員の90%以上が肯定割合(4+3)				教職員アンケート⑥					
		年度末								
学校関係者評価委員の意見	・自己研修の時間を確保するためにも、働き方改革が必要ではないか。 ・働き方改革といわれるが、学校へはあまり浸透していないように感じる。町全体で取組、改善することが必要だと感じる。		学校の対応	○夏季休業中にICT研修を複数回行い、クロームブックの活用についての学級も足並みを揃えて行えるようにした。今後、対話的な学びについての授業改善に向けた研修と合わせて、食育についても全校体制で研修を進めていく。 ○ただ勤務時間を減らすことを目的とするのではなく、自分の1週間の時間の使い方を振り返り、より効率的な仕事の進め方を探ったり、主任等の仕事を1人で抱え込まず、複数の教員で分担して行えるよう声を掛け合うようにする。						